

急性期脳卒中患者への早すぎるリハビリテーションで予後が悪化

脳卒中発症後はできるだけ早期に離床をはかり、リハビリテーション（以下、リハビリ）を開始することが望ましいとされているが、その内容は具体的には定義されておらず、推奨の裏付けとなる強固なエビデンスもない。そこで本研究では、脳卒中後の標準的なケアと比べ、より高強度の活動を、より早期に開始することで予後が改善するかについてランダム化比較試験を実施し検討した。

2006～2014年に5カ国56施設で登録された脳卒中患者2,104例（18歳以上；初発または再発の脳梗塞または脳出血）を対象とし、超早期リハビリ群（1,054例）と標準的リハビリ群（1,050例）にランダムに割り付けた。超早期リハビリの条件として、発症後24時間以内に開始すること、主な内容としては座位、立位、歩行の訓練とすること、標準的リハビリと比べて訓練の回数が3回以上多いこと、の3点を満たすこととした。3ヶ月の機能的予後良好の割合は、標準的リハビリ群に比べ、超早期リハビリ群で有意に低かった（50% 対 46%；調整後オッズ比 0.73； $p=0.004$ ）。3ヶ月後の死亡率は標準的リハビリ群 7%、超早期リハビリ群 8%で両群間に有意差はなかった（ $p=0.113$ ）。非致死性の重篤な有害事象の発生率についても両群間に有意差はなく（標準的リハビリ群 20%、超早期リハビリ群 19%）、長期臥床に関連した合併症の発生率についても差はなかった。

したがって、脳卒中発症から24時間以内の超早期にリハビリを開始することにより、3ヶ月後の機能的予後が悪化する可能性が示唆された。今回の結果により現行の診療ガイドラインが見直され、診療方針が変わる可能性がある。ただし、ガイドラインの見直しにあたっては、用量依存的関連についての解析が必要であろう。

出典：Lancet. Published online Apr 16, 2015; pii: S0140-6736(15)60690-0